IBULIVE いぶりぶ

いぶり+Live

医療法人 社団 いぶり腎泌尿器科クリニック 広報誌

泌尿器科・血液透析

夏号 NO.10 季刊誌

坪院長の健康講座

尿路結石について

《その1》

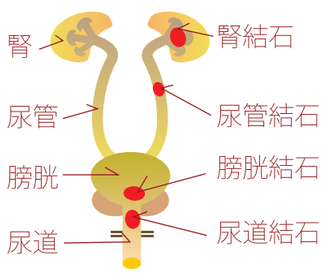
院長 坪 俊輔

尿路結石、いわゆる「石」について、今回は主に症状・診断・手術的治療についてお話し、次回に「石」の原因・保存的治療・予防方法などにつきお話することにします。

さて男性で百人に九人、女性で百人に四人が罹(かか)り、さらに約50％が再発するとされる「石」は泌尿器科で最も多くみられる疾患のひとつです。症状・尿所見などから「石」を疑えば、腹部レントゲン・CT・腎う尿管造影・エコーなどで診断をします。

結石を部位別にみると、図のようになります。腎結石・尿管結石・膀胱結石にわけられ、まれに尿道結石もみられます。尿管結石による強烈な腹～背部痛(疝痛発作)が典型的症状ですが、腎結石では無症状で偶然指摘されたり、ただ血尿だけが症状の事もあります。また尿管結石が膀胱近くに落ちて来ると「膀胱炎症状」で受診される方もいます。

膀胱結石では血尿・尿混濁を伴う排尿障害が殆どのようです。また、まれに結石が尿道にはまり尿がでずらくなって初めて判る場合があります。さて「石」の成分はその80％以上がカルシウム含有結石であり、これは薬で溶かすことができません。(尿酸結石・シスチン結石など一部の結石のみが薬で溶ける「石」です)従って多くの尿管結石ではまず痛みをコントロールし、ついで投薬などで自然排石を期待します。ただし結石が1センチを越えると排石が難しいとされ、体外衝撃波結石破砕術(ESWL)や尿道を経由して尿管に細い内視鏡を通して結石を取り出してくる尿管鏡下結石摘除術(TUUL)が行われます。腎結石は体外衝撃波結石破砕術(ESWL)で治療するのが一般的です。膀胱結石は経尿道的内視鏡下摘除術が行われます。このように「石」対する手術的治療は開腹手術ではなく、現在は殆どが非観血的で侵傷の少ない方法がとられています。なお「石」の再発率は約50％と、当然予防的治療が重要になりますが、それらについては次回お話する予定です。以上、尿路の「石」の診断・手術的治療につき、その概要をお話ししました。



【図】

IBURI UROLOGICAL CLINIC 5th anniversary

皆様とともに歩む
クリニックを目指して！

おかげさまで開院5周年

平成15年11月に地鎮祭が行われた建設地

開院までの10ヶ月

5周年にあたって思うこと…

いぶり腎泌尿器科クリニック 事務長 横井 浩

2003年(平成十五年)十月、三十年勤めた信用金庫を退職、第二の人生が始まった。同年十一月三十日の地鎮祭、工事は天候にも恵まれ、順調に進む。

翌年一月、分刻みの来客と工事の打ち合わせ、職員採用の面接も始める。そんな中、左腕の脇が赤く腫れあがり頭痛が続くので、診てもらうと帯状発疹と診断されたのが、二月のことだった。ストレスやプレッシャーには無縁と思って来た自分にとってはショックだったが、人並みの神経に、少し安心した。

三月、面接した人たちの名前と顔が一致しない。二度目の面接で名前を間違えることもあり、履歴書の写真を確認しながらの交渉が続いた。

4月一日開設準備室に十人のスタッフが揃い、坪院長の朝礼で七月一日開院へ向けた戦いの幕は揚がった。六ヶ月間、机と電話機、応接セットのみの寂しかった準備室が急に賑やかになり、スタッフと飲むコーヒーも美味しく感じられた。

五月、工事も最終段階に入ったようで、現場事務所前では、毎日百人くらいの作業員が朝のラジオ体操を行っている。こんなに沢山の人たちが工事に携わっていることに感謝しながら、この人たちが毎日昼食のお弁当を買ってくれたら伊達市の経済効果に少しは役立ったかなと、信金時代の感情が頭を持ち上げた。

五月三十一日、建物の引渡しが終了、翌日からはほとんどのスタッフが揃い新築の現場で開院準備を開始した。

七月一日、「いぶり腎泌尿器科クリニック」オープン。朝から正面入り口で患者様をお迎えするが、杖をついたおばあちゃんが私の顔を見て一言「あの～通帳失くしたんだけど！」。三十年勤めた信金に感謝した瞬間だった。

新型インフルエンザにご注意を…

副院長 竹内 豊

新型インフルエンザがメキシコを中心に、北中米に拡がり結局のところ、胆振管内にも持ち込まれました。そもそもインフルエンザとは、どういった病気で、治療や予防などについても簡単に、ご説明したいと思います。

インフルエンザとは、ウイルスの一種で、細菌よりも分子量の小さい病原体です。季節性に発症し、特に冬季に流行します。ウイルスの型によってA型とB型があり、それぞれ香港型、ソ連型などがあります。咳や発熱などを主症状とし、糖尿病、腎不全など、基礎疾患のある患者様には症状が重篤化し、生命を奪われる危険も生じます。

治療は現在のところ、飲み薬のタミフル、吸入薬のリレンザがあり、今回の新型インフルエンザにも有効でした。しかし、今回の新型インフルエンザが、晩秋から冬にかけて再流行した際に、タミフルやリレンザが効かないウイルスに変異する危険性があります。そこで、行政としては隔離や水際作戦などの諸処置が必要となってくるのです。

そこで予防です。まず第一に手洗いです。これが一番有効です。うがいはウイルスが咽喉に付着してしまえば四分で感染してしまいます。あまり有効とはいえないのが実情です。マスクは感染を防ぐ効果は?ですが、自分が感染した場合に、他人に感染させないという面では十分に効果があります。

以上、簡単に触れましたが、まず情報を正確に把握し、落ち着いて医療機関や行政機関の指導に基づいて行動していただきたいと思います。

■発行：いぶりぶ発行委員会

伊達市梅本町2番地15いぶり腎泌尿器科クリニック内 TEL0142-21-1400 FAX0142-21-1401

●発行責任者：横井 浩

■発行/平成21年7月10日■4月・7月・10月・1月の年4回発行

※本誌掲載の写真、記事の無断転用は固くお断り致します。

●企画・制作：室蘭民報社

室蘭市本町1-3-16 電話0143-22-5122

心の通う医療を追い求めて　スタッフ紹介

＜取材/室蘭民報社＞

長濱　明子病棟看護師　常に明るく接する看護を

湯のマチ登別で生まれ育った。高校卒業後、介護の道へ進むが二十四歳のときに進路を思い切って変更、伊達市内の看護学校へ入学し、働きながら資格を取得した。

寝る間も惜しみレーポート制作に打ち込んだり、想像以上の厳しさに折れそうになった心も、家族に励まされ克服した。現在も実家の登別から通勤するスタンスは、当時と変らない。どんなに疲れて帰っても、温かな食事と優しい笑顔が待っている心地よさを、パワーに変える。両親からの愛情を、真っ直ぐに受けとめてきた素直さが感じられた。

「患者さんへのケア、対応に悩むことも多い」と真剣な表情をみせるが、常に前向きを信条に「明るく接し、気軽に声をかけてもらえる看護師になりたい」と笑顔をみせた。

緊張感を保ち自覚を大切に　明吉　千恵透析室看護師

室蘭市内の総合病院から転籍し、丸二年が経過した。仕事の分担がはっきりした総合病院とはちがい、臨機応変な対応が求められるのは、資質を高める意味で「刺激になる」と意欲的。基本的には「病院の規模による違いは感じない」という。

看護師になったのは高校時代の先生に勧められ、「手に職を」の考えと一致したから。自分のまわりに医療関係者がいなかったことで、看護師に対しての先入観がなかったのも後押しになった。

人間の生死に、直接的に関わる仕事だけに「緊張感が大切、ゴールのない仕事」と日々目標を持ち臨むことを課す毎日。「技術も機器も進歩するなか、遅れないよう努力したい」と最新医療提供へ向けて、自覚を高めている。

高橋　大典臨床工学技士　仕事を通し患者さんと楽しく交流

室蘭岳山麓の柏木町で生まれ育った。鉄のマチに象徴される工場群を眼下にする住宅地で、のびのびと育った。中学時代はバスケットに明け暮れたスポーツ少年。地元高校の電気科に進学、機械好きと医療への興味から臨床工学技士の道へ進んだ。

趣味は幼少より始めた釣り。最近はスポーツ・フィッシングを愛好、チームをつくるなど本格的だ。休日には全道をエリアに釣行するアウトドア派を自負する。

「仕事は楽しい」と屈託がない。何より人との触れ合いが大好きだという。対人には今後もこだわり、特に接する時間が長い透析には感心が深いという。オールマイティに仕事をこなせることを目指し、医療機器を介し、「温かな交流ができる技士になりたい」と目を輝かせていた。

役立つ人間になりたい　小山　美枝子外来看護助手

室蘭にあって、蘭北地区と呼ばれる本輪西で育った。JR本輪西駅前の急坂を登りつめた、室蘭港を一望するロケーションが、大らかな人柄をつくった。

中学時代からバスケットボールに熱中、高校はその技術がかわれ、伊達高から誘われ入学、二回全道大会に出場するが、強豪の札幌勢に屈する。三年のときはケガにより最後のゲームも途中出場、涙でコートを濡らした青春の思い出を持つ。

若くして両親を亡くし、医療には強い関心があった。「とにかく何か役立ちたい」と精力的に動き回る。にぎやかなことが大好きという、体育会系の性格が周りを巻き込み、明るい雰囲気をつくる。「日々勉強、患者さんが私の先生です」という笑顔には、天国の両親へ向けた感謝が詰まっていた。

清野　宏美医事課・事務スタッフ　ミスなく丁寧な仕事を

開院以来、会計に直結するデータ入力を担当する。スピーディーな仕事が待ち時間短縮につながるという地味であり、重要な職責を担っている。

伊達市内の関内で生まれ育った。全校生徒が二十五人、同級生七人という環境は、「地域は家族、子ども全員みなきょうだい」という、微笑ましく、うらやましい限りの理想的な地域社会で暮らしてきた。

地元の高校卒業後、札幌の専門学校で医療事務を専攻。卒業後、一般事務の仕事に就くが、医療事務へのこだわりは消えなかった。

そんな中、自らの主治医であった坪院長から、クリニック・スタッフの誘いを受け「二つ返事で決断しました」と満面の笑顔をみせた。「一つひとつ慎重に、ミス防止を」と、日々の業務に励んでいる。

TOPIC

開院五周年記念パーティー開く

地域に貢献する医療目指しさらに前進

毎年恒例となった開院記念祝賀会、今年は五周年という記念すべき節目を迎え「いぶり腎泌尿器科クリニック五周年記念祝賀会」として、七月四日午後六時半から、伊達市末永町のホテル・ローヤルを会場に行われた。

132人が集まった５周年記念祝賀会

祝賀会には坪院長はじめクリニックのスタッフ、日頃から業務をサポートしてくれる関係業者などから、合わせて百三十二人が出席、懇親を深めるとともに、地域の医療機関として、さらに発展していくことを願っていた。

冒頭あいさつに立った坪院長は「この五年間に感謝し、地域の方々に満足してもらえる運営を目指し、前進していきたい」と、開院時に掲げた理念の実践を誓っていた。続いて協力業者の各担当者を一人ずつ紹介、和やかな雰囲気のなか、竹内副院長の音頭で乾杯、祝宴に入った。

5周年のお礼を述べる坪院長

出席者は「あっという間の五年」など、思い出話に花を咲かせ楽しいひと時を過ごしていた。

家電を中心にしたゲーム」では、番号発表のたび一喜一憂、会場は大いに盛り上がり、笑い声と歓声に包まれた。

いつも元気ないぶ腎スタッフ

賞品が当たる「ビンゴ

最後は仲山副院長が「人間力で頑張ろう！」と、熱いメッセージを添えた乾杯の音頭をとり、「ヤンヤ」の喝采を浴びながら祝賀会を締めくくった。

コラム column 待合室 No.10

活字離れ　テレビ離れ

○…活字離れは良くいわれるが、ここにきて電波離れ、というよりテレビ離れが加速度的に進行している。確かに最近の番組はバラエティー系が多く、各局の特徴というか、個性がなくなっているように思う。聞くところによると、営業収入の減少で番組制作予算が削られ、こういった結果になっているという。もちろん、本当かどうかは定かではないが…。インターネットの普及が活字離れの一因と良くいわれるが、テレビ離れでも同様のことがいわれている。果たして本当だろうか？。

○…活字離れに関しては、出版物の質の低下も原因の一つと考える向きもある。「読みたい」と興味を惹かれるものがなければ、読まないのは当りまえだ。また、読者側のニーズが幅広くなり、商品として成りたたないということも考えられる。要は活字メディアが時代のニーズに対応出来なくなりつつある―、ということらしい。

○…このことは、テレビ離れにもいえる。視聴者ニーズの多様性には、電波もついていけない。インターネットはいうに及ばず、多チャンネルのケーブルテレビなど、有料のチャンネルには視聴者を満足させる情報量とコンテンツが豊富だ。活字、電波とも、より専門的で深く広い情報が求められている時代のなか、それぞれの性質上、なかなか要望に応えられないのが現状といえる。

○…メディアは時代の生む文化といえる。情報を正確に伝える使命もある。それら根本にあるべきものを忘れ、採算や事業面にだけこだわった結果が、この現状だとしたならどうだろうか。単純に売上や部数に左右される出版業界、視聴率に翻弄されるテレビ各局。足元となる製品の価値観はどうだったのだろうか。事業である以上、きれい事ばかりいってはいられないことはよく分かる。しかし、そのバランス感覚がいま問われているのは確かだろう。